黒毛和種子牛にみられた精巣異常の2症例

淡路基幹家畜診療所

○石川貴将 中川大輔 濱崎健太 香田彩見 藤本修司
宮本孝明 畠中みどり 曾賀久征 喜田利明 大平正信

精巣異常は稀な疾患であり、そのうち潜在精巣発生率は1982年から2005年の24年間で0.3%と報告されている。今回、精巣異常の2症例に遭遇し病性鑑定の結果、精巣上体炎および多精巣症と診断された。

材料および方法

症例1：2013年5月22日生まれの黒毛和種牛。10月28日に右側陰嚢腫脹を主訴として求診。初診時体温39.0℃、食欲不振、陰嚢熱感・疼痛が認められた。抗生物質により治療を継続するも発熱し、陰嚢は肥大化した。11月21日に陰嚢長径20cm大、先端部より自壊、排膿がみられた。陰嚢を切開し長径4.9cmの精巣および周辺結合組織を摘出した。左側陰嚢より長径5.4cmの精巣を常法に従い摘出した。淡路家畜保健衛生所に病理組織検査および細菌検査を依頼した。

症例2：2013年7月14日生まれの黒毛和種牛。12月25日に右側潜在精巣を主訴として求診。腹腔内より管状構造物で繋がった長径約3cmと4cmの精巣様構造物を摘出した。左側陰嚢より長径約6cmの精巣を摘出した。淡路家畜保健衛生所に病理組織検査を依頼した。

結果

症例1：陰嚢内に膿汁と結合織に覆われるように、精巣が位置していた。病理組織検査では精管および精巣上体尾部で管腔内および粘膜下織に好中球の浸潤がみられた。結合組織の一部に精巣上体体部の構造がみられ円形細胞の浸潤がみられた。精巣上体頭部では炎症像はみられなかった。精巣の周囲に著しい結合組織の増生がみられた。細菌検査では大腸菌が分離された。切開後、陰嚢は通常の去勢後と同程度の大きさとなった。

症例2：腹腔内より摘出したどちらの構造物でも精巣および精巣上体の構造が確認された。管状構造物は精巣上体であった。左側精巣は正常であった。

考察およびまとめ

症例1：大腸菌による精巣上体炎であると診断された。大腸菌性精巣上体炎が起こる経路には以下の4つがある。①血行性に感染②尿道から上行性に感染③外傷から直接感染④腹膜炎から精巣鞘膜炎を経て精巣上体に波及する経路である。原発病巣の断定はできなかった。しかし、外傷がみられなかったこと、大腸菌は上行性感染が多いこと、炎症像が精巣上体頭部より尿道側にのみ認められたことから上行性に感染したと推測される。

症例2：右側精巣が2つ存在する多精巣症であると診断された。潜在精巣の手術を行う際、稀に精巣が2つ存在する可能性も視野に入れ、取り残さないよう注意する必要があると考える。